

霜月

『新壑』
55-1号

うたた寝のま昼ま外のしぐるるや夢に突つ立つ千の洋
傘

筆筒に筆は立ちたりからうじて吾れを支ふるひとつの
直立

黄昏 その寂しさまくらぶべく霜月半ばの南瓜まつぶ
たつ

またたくまに來たる霜月くれなるのかぎりを軒に競
り合ふ唐辛子

中流とふ意識したたかに噛み砕くこの金平糖の存在の
価値

洋燈

『新壑』
55-2号

ふ 洋燈の淡きを点し謐かなるひとりと思ひふたりと思

しみじみと訣れしあしたわが洗ふ陶器のしろさ響き
あふかも

わが進ふはつねにまぼろしをとうとと呼ぶにも若き汝が
眉目

見放され縫るすべなき神々と思ふにいとまのをりをり
禱りぬ

傾くるグラスに泛ぶかなしみはガラス細工師の熱き孤
独

やすやすときざしくるは午後の微熱ころざしはその
熱もて研ぐや

冬樹々の群立つ雪原果てあれば嗚呼ころざしのごと
人を恋ふ

雪原に裸樹は立つ故われも佇つ閑りのなきたやすさに
ゐて

ぎりぎりの平和と思ふ危懼のなか冬の気球は離陸を
構ふ

冬の帽子

『新壑』
55-4号

ふゆ帽子冬に忘られて帽子掛けに深き沈思は毛ばだ
つばかり

運ばれるて吾れは何んのけものぞひとり昇降機まふ
ゆ日の檻

珈琲の香を嗅ぐはたまらざりしか茶房に出遇ひ茶房
に訣れぬ

封緘を未だためらふ書簡もてひと生の想ひのたづたづ
しもよ

唐突に昂まりくるわが矛盾明日への記憶のとどめがた
しも

無風の冬

『新壑』55-5号

量のいま来ねる程にあらざれば無風の冬のざんばら髪
よ

累卵・なほ危ふさをかさねゆく冬野は身ひとつの置き
どころ

喝采かな人生と折り合ひはつけぬとふ冬の男の酔ひの
確かさ

口欠けし土瓶にあした一輪の花を挿すゆゑ誹誘す
ら明るし

中流とふ意識たしかに訝しむ土間にばつかりと護謨の
長靴

自我の冬

『新壑』
55-6号

ひそやかに自我を磨く夜のありてきどこをみなのそれ
ぞれの冬

夕篝火達磨となるまで思ひ滾れよ冬をまつしぐらに
過ぎきて

たぎ

父・祖父が遺したる血の言ひ訳をききたしわが血し
きりと騒ぐ

ひる

壮年のかがやきにふと怯むわけても陽光のなかのその
叡智

生涯の基調となす色の決めがたく顔の中なるからくれ
なるや

壁 『新壑』 55-7号

再びを告げて疵つく愚かさを知ればわらわらと髪の逆
立つ

疵つくことまこと怖れて身をかはす究極は己れに基づ
く美学

一途なる新緑に庇はれ重ねるし逢ひの危さに亡母た
ちたまふ

吹く風にちりぢり散りゆく黄の色や黄でありしより
ほかなき連翹

鬱病の左官が壁を塗りこめてそそくさと脚立横抱き
に去る

初夏の言葉

『新壑』8
55-8号

連翹の黄にけだるき夕まぐれあからさまなる言葉に
竦む

そら

樹のかげり宙の翳りの鬱ならむいま言葉こそ耀やかす
てだて

水無月のみづに濯ぐはまなこふたつゆらめくものを見
たきばかりに

耳飾りひとつ失ひし叢をひたすら踏み返す夏至ひる
さがり

風光る初夏の野をよぎりたる眩ゆきふたりを若人と
呼び

詩の危機

『新壑』
55-9号

紫陽花の藍にしづもる謚けさやことわけて聴きたし

うた

詩との訣別

身の危機よりなほ深からむ詩の危機こころいちぢに鉛
筆をとどく

ガラス器にくやしみひとつ盛るなれば夏ゆゑ透明にわが
身衰ふ

薔薇の棘もつことの不可思議に触れてより棘は尖りて
いたく矮さし

飽食にこころ足らざれば何時の日も飢餓の民より貧
しきわれら

杏
告白よりなほみづみづと店頭に盛られて青き夜の巴旦

り
くやしみの未だ盛りの夏のおのが優位は俯くばか

夏の焦躁麵麩もろとも焼かれゆきわが胸処ほどのト
スターの位置

壮年と呼ぶにふさへば夏帽子鏝びろびろと風の中なる

焼く
人生の設計おほかた成らずとも分厚き肉はしつかりと

晩夏

『新壑』
55-11号

いつよりか自らの文字組み立てて自在を愛しひとを愛する

ああ九月 いま超えきたる八月をはるかかなたに置き
て身震ふ

ふりほどく言葉ひとつに打たせるる晩夏の雨の夜のビブ
ラフォン

ひと房の黒き葡萄と牽き合へる霧に重たき園の夕暮れ

黒葡萄のまこと黝く輝きぬ水をはじき陽を弾きたる
に

朱は鋭く
『新壑』
55-12号

陽をうけしサルビアの朱の鋭くて意識の中に退きゆく
血の音

銀蠅の打ちすゑられて果てし夜ただならぬ発光は其
処よりありぬ

掌の中に硝子の破片いくつかを持ちまろめつつわが一生
なり

闘中の壺より洩るる水音かすかなれば永久の音のごと
し

もの忘れに自ら愧じらふ表情もいま少し美しく捉へ
られたく